

第二次大戦末期における日本の戦争戦略 国際関係・小代 有希子教授

昨年、自身2冊目の著作となる『ユーラシアの道を探る』を著した小代有希子教授は、第二次大戦末期の日本の戦争戦略（原題は『Russo-Japan War: Japan's En Route to World War II』）を脱稿した。数年がかりで取り組んできた研究成果をまとめた著作で、年内にも米国のペンシア大学出版会より刊行される予定だ。

「『脱稿』を脱稿した。数年がかりで取り組んできた研究成果をまとめた著作で、年内にも米国のペンシア大学出版会より刊行される予定だ。」

「『脱稿』を脱稿した。数年がかりで取り組んできた研究成果をまとめた著作で、年内にも米国のペンシア大学出版会より刊行される予定だ。」



交換教授として派遣された米国ストーニーブルック大学の歴史学部オフィス

「無策日本」装つた？
たとえば、1945年

定説揺るがす戦時資料を発掘 ソ連参戦を予測していた日本

「大本営戦争指導班は、米国の戦後東アジアで覇権を握ることをソ連は阻むべき、結果的に戦止すると見なし、ソ連の対日参戦時期を予測し続けた。45年4月には『ソ連軍の侵攻開始を『同年初秋頃』、6月には『夏から秋』と微修正し、政府や軍部はこれにシッ

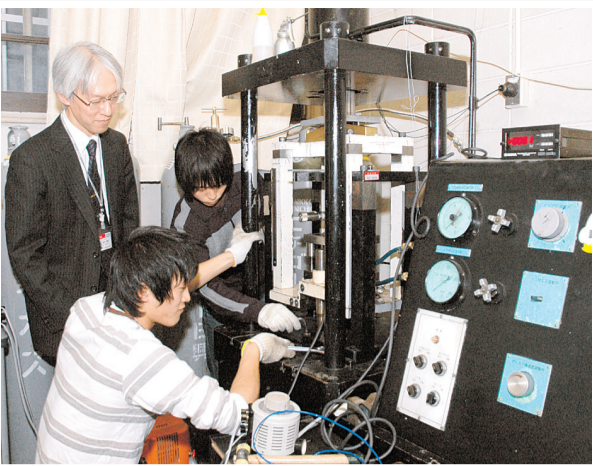
「その説を裏付ける資料がある。海軍少将高木惣吉の45年3月の論文には、『米国の単独勝利は日本が単独勝利し、自らの復讐は厳しいが、ソ連が参戦して勢力範囲を築けば、米国の日本を自



毎年三島キャンパスで行われる日本研究プログラムに参加するストーニーブルック大学の学生と、交流会にて

小代 有希子（こし 得）。ノートルダム大学（ゆきこ）昭和57年 歴史学部助教、ウイリアムズ大学アジア研究学部客員助教、研究員などを経て平成18年より現職。13年に大平正芳記念賞を受賞。日本学。平成4年同大学院 国際政治学会所属。横濱出身。

金属塑性加工技術で「ものづくり」を推進 理工・星野 倫彦教授



研究室近くの5号館にある実験室で材料加工用の機器操作などを指導する星野教授

自動車や冷蔵庫、クーラーなど家庭用電化製品の製造に最も多く用いられている加工技術が塑性（せいせい）加工。その専門とする分野が金属を中心とした加工技術の金属塑性加工である。星野研究室は、いわば「ものづくり」の基盤ともいえる。

「金属材料を曲げたり、伸ばしたり、圧縮したりして製品にする」加工が、星野研究室では金属塑性加工の中でも、アルミニウム合金の押し出し加工に数値シミュレーションやモデル実験を通して加工材（押し出し材）の流動解析を実施した製造・開発にかかわる研究も行われている。

「自動車や冷蔵庫、クーラーなど家庭用電化製品の製造に最も多く用いられている加工技術が塑性（せいせい）加工。その専門とする分野が金属を中心とした加工技術の金属塑性加工である。星野研究室は、いわば「ものづくり」の基盤ともいえる。」

多彩な「押し出し加工」 学生に「ものづくり」を講義 自動車や家電などに広く使用

「このほか自動車のフレームや補強材に使用されるアルミニウム押し出し材の衝撃エネルギーの吸収

「このほか自動車のフレームや補強材に使用されるアルミニウム押し出し材の衝撃エネルギーの吸収

「このほか自動車のフレームや補強材に使用されるアルミニウム押し出し材の衝撃エネルギーの吸収



ドイツ・シュットガルト大学研究所主催のシンポジウムに参加した星野教授（左）

「このほか自動車のフレームや補強材に使用されるアルミニウム押し出し材の衝撃エネルギーの吸収

「このほか自動車のフレームや補強材に使用されるアルミニウム押し出し材の衝撃エネルギーの吸収

プロフィール

星野 倫彦（ほしの） 学科助手。10年専任講師。昭和60年 東京大学工学部船舶機械工学科卒。62年同大学院産業機械工学専攻修士課程、平成2年同専攻博士課程各修了。2年 東京理科大学基礎工学部材料工学科助手。8年 本学理工学部機械工